

問いの力を再生する～問いかけるものへ、子どもの問いに応える

津波の被害を受けた南三陸の小学生から、こんな手紙が届いた。「飯島先生 もし本当にぼうちょうていができたら、わたしたちのまちはどう変わるのでしょうか。もしもいい方に進むのなら、それは、それでいいのでしょうか。そうやって人間は生かされていくのでしょうか？」

これは、わたしが昨年度授業に通っていた小学校の三年生が書いた手紙だ。3. 11の大津波では高台にある校舎の一階にまで波が到達し、その下に海に面してあった生徒達が住んでいた街はすべて流されてしまった。今も教室からは更地になったままの街が広がり、復興の兆しは未だに見えていない。そして、被災地は国が進める巨大な壁、防潮堤の建設計画に揺れている。

子どもの問いは深く重い。その問いには力がある。子どもの問いには、大人たちが立場や利害やカテゴリーでばらばらに分解してしまった問いを、もう一度建て直し生き返らせてくれる力がある。ウィトゲンシュタインは、哲学者の仕事は歪められた問いを建て直すために、問いを治療することだと言っている。この手紙にある子どもの言葉は、その意味でまさに哲学者の言葉だといえよう。

わたしたち大人は、この子どもの問いにどう答えればいいのかだろうか。いや、答えるのではなく、どう応えればいいのか問われているのだ。

問いは、ひとつの生き物だ。それは、生きて動いている。だから、問いの動きを止めて要素ごとに分ければ、問いは死んでしまう。後には、パーツごとにばらばらに分解され分類された、死んだ問いの標本が無数にできるだけだ。標本化された問いをいくら分析しても、そこからは断片的な答えしか得られない。それでも安心したいから、人々は動かぬ答えを求める。動かないことに安心を得ようとするのが人間だ。しかし、動かぬ答えへの依存こそが、人々に迫り来る危機を見えなくする壁になることに、まだ気付いてはいない。

問いの奥にはいつも問い掛けるものがある。それは、自然だ。人はその問い掛けを感じ取ることができなければ、問いに応えることができない。問い掛けるものを感じることができるのは、私たちの心と身体だ。だから、感じる前に、いくら考えても何も分からない。感じる前に分かろうとするから、何も分からないんだ。

問い掛けるものについては、感じることはできるが、理解することはできない。わたしたちには、それを問いの力としてしか感じることはできないからだ。けれども、大人は、それでは納得しない。動かぬ答えが欲しいのだ。だから、問い掛けて来るものを見えないように遮る壁を、無意識に築いてしまう。答えの壁、安心の壁だ。

しかし、心に壁を持たない子ども達は、根源的な問いの力をいつも感じるができる。そして、子ども自身にも、問いの力が宿っている。だから、子ども達が発する問いの奥には、いつも問い掛けるものが生きて動いているのだ。子どもはそうにして、世界を感じ世界と対話している。私は子ども達が感じているのは、全体としての世界という神秘であり、その全体的な効果として現れるものではないかと思っています。

る。だから、子どもの力を借りなければ、大人はありのままの世界と向き合うことができない。実際に、世界を感じて世界を表現できる大人の心の中には、必ず子どもが生きて動いている。

でも、多くの大人は、問いの力に直接ふれることを恐れている。「そんな厄介なことを言うな、もっと現実的になれ」などと言って、済まそうとする。そうやって、問いの本質に触れようとはしないし、問いの力を感じようとしないようにしている。もし、それを感じてしまい、自分の支えとしていた答えが揺らげば、直ぐに不安になり困惑して、感じようとする心と身体に蓋をする。そうやって蓋をした自分のあり様を「現実的だ」「客観的だ」「科学的だ」と言って、自分の答えに同調するように周りの人を説得する。上手く説得できれば、それで安心。この様に、上手に蓋をして、その時々の時流に合った答えを要領よく示す人たちが、表舞台に立ち忙しく口を動かす世の中になってしまった。

自分に蓋をした人たちは、自分達に都合の良い「現実的な答え」を導くために、問いを細かな要素に分解して動きを止めて、生きて動く問いの力を削ぎ落とし、問い掛けるものを見えないようにする。邪魔だからだ。

答えを出せないものを徹底的に排除し、「説得力のある答え」で固めようとする大人達にとって、子どもは説得できない厄介者の代表だ。だから、子どもは社会から排除される。子どもを、知識や理解力の乏しい人たちとして、未熟な大人として、世話や管理をしなければならない対象として、社会から遠くに置いておく。つまり、子どもは社会に参加できない。実際、津波の被災地では、復興計画の話し合いに小学生はもとより中高生さえ参加できていない。

専門家と素人の関係も似たようなものだと思う。専門家は、専門用語で問い掛ける者を遮る壁を築く。対話ではなく、説明や説得を行う。そのようにして、人々の問いの力を萎縮させている。ここに、今日の社会の貧困の原因がある。これこそが、心の貧困を生む権威の壁である。社会は至る所、このような貧しい壁(見せかけの対話)で覆われている。その象徴が、全体としての世界から切り離し、分厚い壁で囲んだ自己完結の世界を構築し、自然との対話を徹底的に排除しようとする原発だ。

そして、あの日あの出来事が起きた。動かぬ答えと安心が造った崩れないはずの壁が崩れ、溶けないはずの壁が溶け落ちた。権威の壁が見事に崩れ落ちた。

大津波が、わたしたちに与えた問い。問い掛けるものが、突然私たちの前に現れたのだ。あの日、わたしたちは、自然がいまだに理解できない奥深い存在だということ、痛いほど思い知らされた。わたしたちは忘れていた。自然のすべてが問いであり、自然とは問い掛けるものが潜在する場であるということ。「分かっている」という思考停止(安心を与える壁)によって、忘れられていた対話があったことに気付いたのだ。

本物の科学者は、分からないことを人々に誠実に示すものだ。だから、定説だとか常識だとかと言って、断定的な物言いをする科学者や研究者には十分に気を付けたほうがいい！実際に「原発は絶対に安全です。」と自信に満ちた発言をしていた科学者や専門家が数多くいた。そして、事故後にそれらの学者が言った想定外という言葉から伝わる軽薄さ無責任さには、ただ呆れるばかりだった。

世間には肩書きは立派でも、中身は偽物という詐欺師が数多くいることに早く気付いた方がいい。肩書きも、また人々に動かぬ答えと安心を与える装置のひとつだ。ただ、肩書きで生きる人間に本物はいない。肩書きは、人に安心を与える装置だが、対話を妨げる壁でもある。

御用学者は、目の前に壁を置きながら対話をする振りをする。彼等は、問いかけるものとの対話を恐れているから、答えの分厚い壁を築くのだ。それは、心と身体に蓋をして生きる人達に、権威と安心を与えるための壁でもある。

被災地では、津波の予想される高さや、到達範囲に基づいて、再び安心の壁が築かれようとしている。しかし、安心の壁によって、海からの問い掛けから、人々が遮断されてしまっているのだろうか。果たして、海との対話が失われたところに、海と生きてきた人々の真の安心や復興はあるのだろうか。

分かっているから安心という姿勢では、自然と真摯に向き合って生きることはできない。自然からの絶え間ない問い掛けに向けて、常に自分の心と身体を開いていること、感じる前から分かろうとしないこと、それらが、人間の生存にとっては不可欠な条件なのではないか。

ひとつ忘れてはならないことがある。人間という存在自体が、ひとつの問いであるということだ。私たちは、なぜ何の為にここに生きているのか、誰もがその問いを抱え、問いそのものとして生きている。問い、それはわたしたち自身である。そのように、本来私たちは、問いとの対話を糧にして生きている生き物である。だから、私たちは今こそ、問いの力を取り戻さなければならないのだ。

子どもの手紙から受けた衝撃が、わたしにこのような文章を書かせた。これも問いの力の現れであり、被災地で問いの力が生きて働いている証でもある。問いの力が、人々に宿っている限り、希望がある。子ども達の問いに応えることができるか、それが復興のあり方を、そして被災地の未来を左右するだろう。

2013年4月8日